

「第1回ミニ懇話会」報告

廣大マスターズ広島 広報担当：圓山 裕

第1回ミニ懇話会が下記の通りに開催された。

日 時：2019年7月27日(土) 16時30分～17時50分
場 所：東千田未来創生センター・ミーティングルーム4-6
講 師：植村泰夫先生（元文学部教授）
題 目：「インドネシア史研究と私」
参加者：10名

第1回ミニ懇話会では、この企画の提案者である植村泰夫先生（東洋史）によるインドネシアの農村における経済と交易に関する歴史的研究について、ご自身の現地調査での思い出や文献研究のご苦労なども含めてお話を伺うことができた。

まず、インドネシアの地図を示しながら、配布資料を用いて国土、気候、人口、言語・民族、宗教、政治体制、経済について紹介された。近年の発展が著しいインドネシアだが、私達はその地理と歴史、社会と文化など知らないことが多いと感じた。そして、先生の著書「世界恐慌とジャワ農村社会」（勁草書房、1997年）を拝見しながら、ご研究の動機と目的、研究の方法と経緯および成果などについてお話を伺った。

インドネシア史研究では、オランダ植民地時代から20世紀前半までのジャワ農村社会の変遷について、オランダ語の同時代史料に基づく分析に集中したこと、特に、第一次世界大戦期の1910年代から世界恐慌期の1930年代にかけての糖業プランテーションの不振による農村社会の変質を研究したことを強調された。史料収集では、オランダの国立文書館などで膨大なオランダ語史料のコピーを作成入手されたそうで、「体力勝負の歴史学」と言って笑いを誘った。その後の研究では、インドネシアの主要5島からなる広大な領域から外に向かったの流通と「多様性の中の統一」という国民統合に向けた経済的基盤の形成過程に興味関心が広がっていったとのことであった。

先生は、少年時代のNHKの番組「特派員報告」による宗教と文化への興味から東南アジアへの関心をいただき、これが大学での東洋史志望につながったとのことである。「インドネシア近世の経済に関する歴史研究では、糖業とジャワ農村社会の関りについてオランダ語の文献史料に基づく分析が不可欠だ」と先生のこれまでの経験に裏打ちされた指摘があった。今後は、第一次世界大戦期の研究やオランダ語文献の翻訳、ジャワ村落論などを継続して議論していくつもりである、と先生の「これから」について言及された。

講演終了後、専門が異なる参加者から様々な質問が寄せられた。例えば、世界恐慌期の経済構造と混乱、砂糖価格の暴落による農村の疲弊、「貧困の共有」という村落共同体の原理、糖業プランテーションと米作の拮抗などについてである。また、海洋国家の交易と安全保障、ヨーロッパ・アジア間の経済摩擦、恐慌期日本の農村の疲弊と大陸経営なども話題になった。

以上、植村先生の長年の研究成果に基づいた興味深い話題が提供され、実に有意義な時間を共有する機会となった。本会の趣旨に叶ったミニ懇話会になったと思われる。懇話会の後、鷹野橋の「かなり屋」にて懇親会を行い、引き続き世界恐慌期日本の政治と経済の話題で大いに盛り上がった。

(講演者による配布資料をご参照下さい。また、ミニ懇話会とその後の懇親会での写真を添付します。)



講師の植村泰夫先生



ミニ懇話会の参加者



ミニ懇話会後の懇親会（かなり屋にて）

0, インドネシア簡紹

[国土面積] 1,948,732km² (日本の5.5倍)

北緯6度~南緯11度(南北1,888km)、東経95度~141度の間(東西5,510km)のヨーロッパ大陸に匹敵する広大な海域に主要5島(スマトラ、ジャワ・マドゥラ、カリマンタン、スラウェシ、イリアンジャヤ)、30あまりの小さな島、全17,508島、うち有人島は約3000

[気候]

雨季(12~3月): 西モンスーンによりインド洋の湿った空気到来

乾季(6~9月): 東モンスーンによりオーストラリア大陸から乾燥した空気到来

平均気温: 沿岸平地部28度、内陸部と山間部26度、高地23度

[人口]

約2億5000万(中国、インド、アメリカ合衆国に次ぐ)、人口密度124人/km²

地域的偏差: 人口の60%が面積比6.89%のジャワ・マドゥラに集中、密度は1000人/km²、ジャカルタ首都特別区密度4,500人(cf. 2016年東京都6,123、広島県338、日本全国平均339)

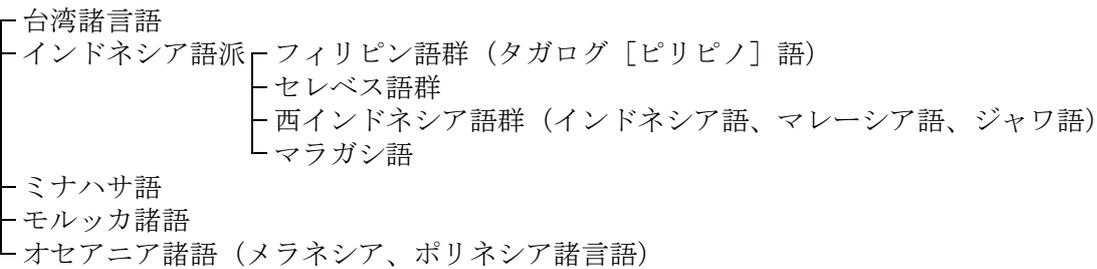
パプア(かつてのイリアンジャヤ)9人

ジャワ・マドゥラ人口= 19世紀以降に激増

1802年360万、1815年450万→1900年2850万→1930年4172万→1961年6299万→1985年9950万→1997年2億超→2010年2億3000万

[言語・民族]

- ・「多様性の中の統一」(Bhinneka Tunggal Ika) という国是
- ・言語状況: 多様性=数百の地方語(Bahasa Daerah)と、統一=国語=インドネシア語(Bahasa Indonesia)
- ・オーストロネシア語族に属する



- ・民族集団の多様性

1つの民族=インドネシア民族(Bangsa Indonesia)

多数のエスニックグループ= Suku Bangsa: 固有の文化、言語(地方語)、慣習

華人の存在= 1997年現在731万人(世界で最も華人が多い)、全人口の3%強

経済的強者=財閥100名のほぼ全てが華人系

[宗教]

- ・6 国家公認宗教: イスラーム 87.21%、キリスト教 9.87%(プロテスタント 6.96%、カトリック 2.91%)、ヒンドゥー教 1.69%、仏教 0.72%、儒教 0.05%、その他 0.50% (2016年, 宗教省統計)
- ・パンチャシラ(建国5原則): ①唯一神への信仰、②公平で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④協議と代議制において英知によって導かれる民主主義、⑤インドネシア全人民に対する社会正義、

[政治体制]

- ・旧体制 Orde Lama(~1965年): 初代スカルノ大統領(政治優先)、65年9・30事件で失脚
- ・新体制 Orde Baru(1965年~98年): 2代スハルト大統領=「開発」政治、西側との結びつき
経済成長と汚職(ファミリービジネス)、強権政治
98年アジア通貨危機を契機とする経済・政治不安の中で失脚
- ・改革の時代(98年~): 3代ハビビ(98年5月21日~10月20日)、4代ワヒド(~2001年)、5代メガワティ(~2004年)、6代ユドヨノ(~2014年)、7代ジョコウィ(2014年~現在)

[経済]

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
1人当 GDP(名目)	2,977.0	3,498.2	3,562.9	3,666.8	3,531.9	3,374.5	3,605.1	3,876.8	3,927.0
経済成長率(実質)		6.2	6.0	5.8	5.6	4.8	5.0	5.1	5.17
物価上昇率	7.0	3.8	4.3	8.4	8.4	3.4	3.0	3.6	3.1

・1997年7月のアジア通貨危機後、インドネシア政府はIMFとの合意に基づき、銀行部門と企業部門を中心に経済構造改革を断行。政治社会情勢及び金融の安定化、個人消費の拡大を背景として、2005年以降の経済成長率は、世界金融・経済危機の影響を受けた2009年を除き、5%後半~6%台という比較的高い成長率を達成。2010年には一人当たり名目GDPが3,000ドルを突破。(外務省ホームページ)

1. 現在、何を研究しているか(資料1参照)

- ・第一次世界大戦期の、外領を中心とした交易に関する貿易統計の分析
- ・史料：オランダ国立図書館から同時期の統計をダウンロードして使用

2. なぜ、このテーマなのか

(1)これまでの私の研究(「業績目録」参照)：

- ・オランダ植民地期ジャワの社会経済史(「農村・土地問題」)で出発
「350年の植民地支配」：① 1602年 VOC 設立~18世紀末 VOC 倒産、② 19世紀初頭~オランダ植民地政庁による直接支配、③ 19世紀後半~外領の植民地化進展→1910年代に蘭領東インド植民地完成、④ 1942~45年日本軍政→45年独立宣言→対蘭独立戦争→49年国際的に承認
- ・主に19世紀後半~20世紀前半のジャワ農村社会の構造を、オランダ語同時代史料に依拠して研究
膨大なオランダ語史料と、ほとんどない現地語史料
- ・1つの到達点：学位論文→97年出版の『世界恐慌とジャワ農村社会』(著書)
プランテーション型植民地にオランダの手で再編されたジャワ社会が、世界恐慌でプランテーションが不振に陥った時に、どのように変質したかを追求
正味7年間の仕事：1990年10月~91年7月には国立文書館などでひたすら史料収集の日々
植民省文書、民間会社文書、植民地期刊の報告書など、コピー200kg、フィルム60巻余
国際交流基金の援助
400字詰め原稿用紙で950枚+200あまりの統計表 = 「体力勝負の歴史学」

(2)流通への関心の移行

- ・業績目録の(24)が最初
- ・地域社会の構造を流通面から捉え直すことで、新しい姿が見えてくるのではないか

(3)1910年代への関心

- ・業績目録の(8)が最初→その後(10)、(19)、(21)、(42)、(43)
- ・1910年代=世界恐慌期に劣らない「変革期」
①大戦による欧州との交通途絶：日本の経済進出、米国の意味が増大、② 1910年代末の食糧不足、スペイン風邪大流行、③「近代的」民族運動の開始時期
- ・①②③をどのように統一的に理解するか：最近の「インドネシア国民経済」形成開始説への疑問

(4)外領への関心の拡大

- ・流通をテーマにすると、ジャワのみに対象地域を限定できない
- ・国民統合問題との関わり：「多様性の中の統一」→国民国家としての経済的基盤があったか否か
- ・19世紀初以来のシンガポールの強い経済的影響をどう理解するか

3. なぜインドネシア史研究を志したか

(1)東南アジアへの関心の始まり：子供時代のNHK「特派員報告」→東南アジアの宗教や文化に関心

(2)京大東洋史時代

- ・1966年京大文学部入学→もともと東洋史志望だったが、教養時代に東洋史か地理学か迷う
- ・東洋史進学：①3回生ガイダンスで「東南アジアの宗教を勉強したい」⇒「京大では東南アジアはできない」(の初代東南ア研センター長)、②自由放任主義の教育：学生が何をやろうが、教員は干渉しない、③「インドネシア近世史の研究」(中村孝志天理大教授)という授業
④学生間の読書会：羽仁五郎「東洋における資本主義の形成」に触発される
- ・卒論：「ラッフルズのジャワ改革について」
イギリス統治時代(1811~16年)のジャワ副総督 T.S.Raffles の土地改革を扱ったもの
主な史料：Substance of a Minute, 1814, 293pp.(Raffles と地方官の間の文書を集めた史料集)
大学紛争で授業なし：漢文落ちこぼれ学生→留年と大学院浪人
- ・修論：「糖業プランテーションとジャワ農村社会」=スラバヤの糖業と農村社会の関わり
オランダ語を独習：Teach yourself Dutch, 『オランダ語4週間』
史料集め：東洋文庫(東京・駒込)で『福祉減退調査』、柏市在住田中先生宅へ史料を借用に、天理詣
指導教官側：提出まで植村が何をやっているか全く知らず、植村は修論が書けないと思っていた節
- ・4年5ヶ月の助手時代：本の分類整理(中国書の四庫分類)←第2外国語=中国語
- ・東京コンプレックスと中国史コンプレックス

(3)1983年9月広大へ：東南アジア史で飯が食える幸せ

- ・初のインドネシア調査(83年9月~12月)、2回目(85年9月~86年1月)参加=インドネシア語実地訓練
- ・授業：東南アジア史概説、インドネシア史特講、英文テキスト購読など、他に課外でオランダ語、インドネシア語授業⇒課程博士学位を6人(研究者に就職したのはベトナム史、比較日本学の2名のみ)
- ・総合人間学講座への移籍(2001年)：日本学の授業担当→アジアと日本の関わりに対する関心の深化

4. 今後の計画

(1)第一次大戦期研究継続：ジャワ北海岸地方も対象に(未刊行鉄道会社文書、ジャワ銀行文書利用)

(2)Herinneringen van Pangeran Aria Achmad Djajadiningrat, Amsterdam, 1936, 364pp.進行中の翻訳完成

(3)ジャワ村落論への回帰：これまで収集した史料の利用